

## 雑誌「少年園」と森鷗外

松 木 博

### 序 章

森鷗外の初期の翻訳作品に「新世界の浦島」がある。ワシントン・アーヴィングの「リップ・ヴァン・ウインクル」がその原作だと言え、奇抜に見える題名も納得できることだろう。その命名に翻訳者鷗外の機知を感じることも出来そうである。

だが、この題名は厳密には鷗外の創作であるとは言いがたいのだ。

「新世界の浦島」が連載形式で発表されたのは、明治二十一年十一月創刊の雑誌「少年園」第十三号（二十二年五月三日）から二十号（八月十八日）にかけてである。ところで、亀井俊介氏が既に指摘しているように、連載開始一カ月前にあたる第十一号（四月三日）には次のような題名を持つ英文が掲載されていた。「URASHIMA: A JAPANESE RIP VAN WINKLE」この英文には、「記者」という署名の、恐らく編集者と思われる人物による識語が付されている。その識語は本文が昔話の浦島太郎を英訳したものであること、この雑誌の主な読者の少年達には「趣味殊に多かるべしと覚ゆる」と掲載する理由が述べられて、次のような一文で結ばれていた。「いづれ RIP van Winkle の詳しき物語は、他日本誌に載することあるべし」。題名の対応関係や掲載の時期から見ても、鷗外の翻訳「新世界の浦島」が、この識語に

対応して現われたものであることは明らかだろう。

いうまでもないことだが、私はここで題名のオリジナリティについて語ろうとしているのではない。私が注目したいのは、「新世界の浦島」が偶然にこの雑誌に掲載されたものではないと考えられること。誤解を恐れずに言えば、この雑誌の編集プログラムに鷗外もある程度関わっていたと推定出来ることである。まずここで、二つの作品の冒頭部分を見てみたい。

A WAY off in Japan, a great many years ago, there lived a lad called Urashima. He loved to fish, and spent all his time on a big rock waiting for a bite; but he was a lazy fellow and liked to nap, so often missed his fish. However, he had a kind heart, and one day, as he was passing along a lonely road, he saw a bad boy tormenting a poor green turtle that had somehow gotten far away from the water. Urashima rebuked the lad, and gently placed the turtle in a pool near by. Then he strolled toward the sea, and, getting his nets and lines ready, he leaned back and went to sleep.

(URASHIMA: A JAPANESE RIP VAN WINKLE.)

ホトソンに沿うて登つて行つたことのある旅人は、屹度ケエツキルの山を覚えて居ませう。これはアパラツチエン山の幹から出た小枝で、遙に西に向つて、仰いで見れば、麓は河の畔に垂れて、巔は空に聳え、自づと近隣の地を支配して居ます。四季の変、天氣の更は勿論、一日の中でも、一刻一刻に不思議にも色と形とを改めるは此山です。それだからこの山の見える処に住む女房は、皆なこれを晴雨計にします。好い天氣の続くときは、青か紫かの衣を着て、その大膽らしい界の線を翳のない夕空に画き、時としては、近き傍の森には、雲も烟も見えぬに、その巔は、鼠色の霧の環を掛けられ、西山に這入り掛つた夕日の、最後の光に触れて、凱旋の人の戴く冠の様に光り輝きます。

此奇怪な山の麓で、旅人はある村から立ち騰る、弱々しい烟を見ましたらう。丁度あの晴れた空の青インキが、近い林の緑色に移り行く所で、木の間からちら／＼と屋根の見える村です。この村は小さい、古風な村です。それも尤も、むかし和蘭陀の移住民が、当時善政の聞えのあつたベエテル、ストユイエサント（渠は無窮の平和に息め）の時代に建てたのだから。四五年前までは、まだ和蘭陀から持て来た、小さい黄いろな煉化石で積み上げた、格子窓の附いた、屋根の正面に破風を造つた、その上に風の嚮きを知らずる鶏が立つて居る家が、沢山残つて居ました。

丁度この村に、この家の一つに、本たうを言へば、随分雨風に打たれた破れ家に、まだ此辺が英領であつた頃、愚直な、気の好いリツプ、ファン、キンクルといふ人が住んで居ました。

#### （「新世界の浦島」）

「少年園」の読者は、よく知っている物語を未知の言語（英語）で読み、一ヵ月後から未知の物語を口語体（言文一致体）で読み進めたことになる。未知の物語とは言え、内容は題名に端的に示されている。読者は意識することなく英語で物語を読むことに親しみ、作品を

比較するという視点を修得しつゝあつたと言えよう。ここに比較文学、比較文化という語を用いることもできる筈だ。鵜外の作品は、読書体験として充実したこの試みに組み込まれていたのである。そうしたことを理解するなら、編集のプログラムに鵜外がどのようなかたちであれ関与していたと考えることは無理ではないだろう。

しかし、そのような考察はこれまでなされてこなかった。何故なら鵜外の作品で「少年園」に発表されているのは、「新世界の浦島」とアルフォンス・ドーデ原作の「戦僧（十号）」の二作品に過ぎないからである。二つの翻訳を明治二十二年という早い時期に掲載しただけの雑誌について、鵜外との関係について十分な考察が行なわれてこなかったのは当然といふべきかもしれない。

だが、よく知られているように、「新世界の浦島」の「少年園」掲載終了後でもない二十二年十月二十五日、鵜外は文芸評論誌「しがらみ草紙」を創刊する。この時期の近接は何か意味を持っているのではなからうか。「しがらみ草紙」創刊の宣言に、鵜外は強いメッセージを込めている。その中心に位置するのが、審美学を確立して日本の文学を改革していこうとする意識である。その意識はどのように形成されていったのか。先行する雑誌メディアの検討も必要に思えるのだ。

鵜外と雑誌との関わりを論じる時、従来この「しがらみ草紙」から「めざまし草」「芸文」「万年艸」というような自ら発行した雑誌や「昂」のように後援した雑誌について論じられることが多かった。それに終始していたといつてもよい。確かにそれらの雑誌との関係は密接であり、十分に跡づけることができる。けれどもそれは言つてみれば顕在的な関係とでも呼ぶべきものであつて、それ以外の潜在的な関係もまた確実に存在していた筈である。「潜在的」とは妙な形容だが、殊更にこう表現してみたのは、作家とその名前が刻印された文章だけを扱っている研究に時にオートマティズムを感じることもあつたからである。さらに言えば、潜在的な関係を想定する時に、顕在的な関係も新たな様相を見せてくるように思えるのである。



本稿において私は、そうした潜在的な関係を探る試みとして「少年園」という雑誌を、鵬外を背景に置いて読んでみたい。鵬外と「少年園」、この両者が明治二十年代の時代状況の中でいかに関わり、いかに関わっていなかったか。それを明らかにしていきたいと思う。

## 第一章

雑誌「少年園」は、創刊（明治二十一年、一八八八年）から百年後の一九八八年に、不二出版から総目次・索引が付された復刻版が出され、本文の確認と検索が容易になっている。この章では、滑川道夫氏による復刻版の解説も参照しながら、この雑誌の基本的性格について分析してみたい。

「少年園」は愛媛県師範学校長や文部省御用掛を勤めた山県悌三郎によって、明治二十一年十一月三日に創刊されている。発行部数は創刊当時一万二千部、のち一万八千部まで伸びたとされる。青少年のための初めての総合雑誌として、構成などに種々の工夫が凝らされている。例えば、雑誌の名称がそもそも少年のための開かれた庭園という意味を持つわけだが、内部の企画も「学園」（学習に役立つ情報、知識など）、「文園」（詩・小説などの文芸欄）、「譚園」（偉人伝や学校の紹介記事など）、「叢園」（なぞなぞ、クイズや短い読物など）、「芳園」（読者の寄稿欄）といった園の名を与えられていた。第二十五号「芳園」欄に掲載された吉川潤二郎という学生の文章が「吾人豈園主ニ対シテ謝セザルベケンヤ。」と結ばれていたことから、そうした工夫が少年読者に新鮮であったことが推測出来る。

しかしながら、読者を本質的なところで引きつけていたのは、私見では、全国に広がる読者の間の地域差を解消し克服しようとする編集姿勢と読者層を限定した編集方針である。以下、それらについて具体的に見ていくことにしたい。

創刊号には、「発刊主旨を述べ先づ少年の師父に告ぐ」と題した巻

頭文があるが、その中に次のような記述が見られる。

而して実に学校の巍然空に聳え樓台の観をなすもの、豈啻に『南朝四百八十寺』の比ならんや。小西湖の西、高林鬱蒼の間に煉瓦の巨堂宏壮の光を放つは是れ帝国大学なり。小赤壁の北、清流一帯の上に花崗の石室十丈の影を倒にするは是れ高等師範学校なり。農林学校は遠く駒場に風塵を避けて汽犂馬耕に国光の根柢を培ふ。高く浅草の天に煤煙を抹するは是れ職工学校なり。遙に東台の風に鸞鳳の声を弄するは是れ音楽学校なり。高等女学校は天女パラスの美を養ひ、學術学校は神像ゾオイスの真を写し、高等商業学校は神田に第一高等中学校と相對し、慶応義塾は三田子独り自由の色を占め、其他官立と私設とを問はず其名の世に知られたるもの百を以て数ふべし。而して東京八百八街到る処に青年学生の徘徊せざるなく、墨陀の花にボートの競漕を為すもの、飛鳥の秋にクリケットの遊を為すもの、公園に麒麟車を転ずるもの、品海に遊泳術を修むるもの、銃を提げ黄犬を牽き野外に鳥を逐ふもの、船に掉し漁網を結び柳陰に魚を窺ふもの、風琴を月下の樓に弄せるもの、洋詩を落花の家に謡ふもの、皆是れ書生課外の娛樂なり。古希臘の亜丁と雖も斯くまでに箇人的の教育は応に発達せざりしならん、今の独逸も又此に比すれば左のみ学生の生活の愉快を誇るに足らざるべし、豈又末曾有の盛事に非ずや。（以下略傍線引用者）

まさに絢爛たる叙述がなされて、東京にある、大学をはじめとする高等教育機関が夢を抱かせるようにやや理想化されて描かれている。そして同時に、「遊学の楽」の題のもとに、地方の少年達へ上京し入学するまでの実際的な指導が以下のような形式でなされてゆくのである。少し長く引用してみたい。



東京に出れば学者にもなることを得可く、政事家にもなることを得べく、商法家にも職業師にもなることを得べしと思ひて、前後の考へもなく、東京の有様を知らず漫に故郷を駆け出すは甚だ誤れる事といふべし。東京は一天万乗の聖天子の在す所、政令法度の根源たる大政府の位する所にして、大学中学より諸技芸學術等の学校一として在らざるものなき所なれば、少年の此地に出で来りて、其志す所を修めんとするは必ずしも非とす可きことにはあらねど、唯此地に来らんには夫れ／＼の覚悟あり、又夫れ／＼の目的を着け予め身を寄する場所等まで考へ置かざる可からず。前の考へもなく東京の有様をも詳にせず一目算に出て来るとも何事かを学び得らる可き、何事かを為し得らる可き、維新の當時か開港の初め頃には間々僥倖を得て或は名士の庇保を蒙ふり、或は貴顕の門下に入り、一文の資なくして欧米に遊び、半歳の日月を経ずして万金の富を得しものなきにあらねど、今は時勢全く一変して、一般に秩序正しくなりつるものから、かゝる僥倖は夢にも得難く正当なる順路を踏むにあらざれば東京に来るも決して一事を成し一業を知る能はず、却て其身を誤り、果ては如何ともすること能はずして、身を雇人請宿に寄せ、湯屋の木拾ひ蕎麦屋の出前持ちとなるにあらずは、轅を街頭に執りて往来の人を待つに至ること必せり。是れ蓋し今日余輩の目撃する所なり。されば地方の少年たるもの東京に出でんと欲せば必ず先ず學資の出づ可き方法を確定し、而して身を寄す可き処を定め、入学す可き学校又は塾舎を予定し、而る後身を闇闇に起して笈を東京に御す可し。

(以下略)

この「遊学の槩」欄は好評を得て、「明治二十三年東京遊学案内」となり、以後年刊の単行本として上京する学生の必携本となったのだった。これを見ると、いわゆるマニユアル文化は現代の特徴とはいき切れないことがわかる。それはともかくとして、学生にしてみれば、学

問の都への憧れをかきたてられ、その上にその憧れを実現する方策が示されることから「少年園」をより熱烈に支持することになる。東京という明確な目標を設定したことで、読者に内在していた地域差は解消を約束されたのだ。中央への志向といえは平凡と感じるかも知れないが、明確な目標はいつの時代にもやはり不可欠なのである。

さて、もう一つ読者を拡大し定着させる効果を挙げたのは、その年令を限定したことであつた。前記「発刊の主旨を迷べ先づ少年の師父に告ぐ」では、読者は次のように漠然と示されるに止まっていた。

予輩は一に今の少年諸君中小学の生徒諸子に向て大に望を属するものなり、明治の教育が如何なる美大の果を結ぶや一に諸子の未来に之を見んと欲するものなり、

しかし、やがて各分野の執筆者によつて、自然と限定されていくことになった。例えば有力な執筆者の一人であつた宮崎湖処子は、第十二号(二十二年四月)で次のように書いている。

少年園主人の懇切なる勧告に由て、余も又少年諸君の一友たる印として、諸君に對顔すべき事とはなりぬ。余は固より諸君を懐しく思うものなり。何となれば諸君は今、余が七八年前に過ぎたる旅程に上り焉ある人にして、余も眺めて通りし世界をば、太と楽しく感ぜしのみならず、又他の長者よりも太と楽しく思はれたるを記憶すればなり。然して諸君の旅は進歩的にして退去的のものならざる故に、余は諸君の生活、及び諸君に先立てる、而も諸君も又必ず到着すべき年令に於ける、二個の生活に就て一言せんと欲す。

(傍線引用者)

元治元年生まれの湖処子はこの時二十五歳であるから、読者をその七八年下とすれば十六か十七歳になる。すなわち、当時中学校の卒業を



控え、いままさに東京に遊学しようとする少年達が、湖処子によって想定された読者であった。発刊時に雑誌が広く「中小学」生を対象にするとして述べていても、読者の反響などから湖処子は実際に語りかけるべき対象を把握していたのである。湖処子の予想通り彼らは、懸賞や作文の投稿において競い合い、「芳園」という投稿欄の質を高めていった。やがて活性化した投稿欄は、「少年園」から独立して「少年文庫」という隔月刊の雑誌となる。その中から窪田空穂や川虹柳江、北原白秋、有本芳水などが輩出していくことになる。

さらに、これから学ぶべき外国語として英語を推薦していたことも大きな特徴である。山県梯三郎ら編集スタッフの手になると考えられる「遊学の栞」の第四号掲載分には、次のような記述がみられる。

#### 遊学の栞。

##### 東京の学事。

東京に於ける学界の有様は、三四年前に比べれば実に異常の変動をなせり。三四年前に在りては学問といえは独逸学に限るものゝ如く、哲学の玄妙なるは素より、理学の深奥なる、医学の精密にして新創なる、法学政治学の正確にして根拠ある、何れか独逸文学の上に駕するを得んとて靡然として皆独逸学に従い、英学を修めたるものも仏学を講じつゝあるものも、老成着実の人より少壮幼童の輩に至るまで、此独逸学を講ぜざるはなかりき。而るに其後政界の余響に感じて、又もや学運の一変することはなれり。即ち内地雑居などいえる噂の、或は之が原因をなせしによるか。

西洋人の内地に入り来りて居を維うるに至らば、相互に交際せざる可からず、外人と交際するには最も広く万国に行わるゝ言語を学ばざる可からず、独逸は如何、仏語は如何、独逸語は文学上には必要なれども、交際上には通じ難し、仏語は品格上は高尚優美なれども、使用の区域会て英語の五分之一に及ばざるを如何にせん、五洲万国到る処の海港には三色旗の飄えらざるはなく、英語

の通ぜざるはなし、此語をしも覚えたらんには其商業工業上に効益あること知るべきなりと。此議論よりして此に又独逸語の小衰状を来し今は英語の大流行となりぬ。其宜しきに適せしや否やばさて措き、兎に角に、学界の大変動という可し。

(傍線引用者)

この文章は、ドイツ語から英語へという外国語学習の転換を鮮明に表現している。その他、第九号には次のような文章があらわれる。古くは南蛮、そして西欧あるいは泰西という言葉にあるヨーロッパ中心の考え方から離れて、「少年園」はアメリカ中心の考え方を若い読者に説き始めていたのである。

##### 米國に留学せんとする者の爲に。

米國に留学せんとする者の爲めには、また参考となるべしと思ふものあれば、左に之を掲ぐ可し。是れ米國バーデニヤ州サレム府ロアノコ専門学校長デュリヤス、デ、トレハー氏より福岡子爵に贈られたる書翰なりとて東京日々新聞に載せしものなり。今其要点のみを摘録せん。

(上略) 本校の保管人に於ても、殊に日本人に許すに、正科の内らてん語の代りに、英語を学びしめ而して全科を卒業せしものには、Bachelor of Arts 大学得業生の学位を授與せんと、学位例迄の変更致し候。本校に於ては他の学科同様英仏独語に於ても全科を履ましむる事に御坐候。而して他國人の爲めに、時宜により殊更階級を設け、英語会話をも教授可致候。(以下略)

こうして「少年園」という雑誌を概観してみると、題名から連想される童心主義や所謂少年雑誌というイメージからは遠い存在である。娯楽性や抒情性以上に、青少年への鮮烈で実際的な示唆が豊かに内包されているのだ。投稿欄をもう一冊の雑誌として独立させることなどを考えても、発行者の柔軟な姿勢と強い意欲を感じることが出来る。

それは、「しがらみ草紙の本領を論ず」の末尾で文人達に「抱負する所を書して之を新声社に投ぜよ」と呼びかけた鷗外の理想とした雑誌のあり方でもあった筈である。

## 第二章

前の章で述べたように、「少年園」は留学の対象国としてまずアメリカを考えていた。外国語としても英語を重視していた。それは、当然記事の数にも影響している。ペンジャミン・フランクリンの伝記(六号)、南北戦争で將軍として活躍し、後に大統領となったグラントの少年時代(十一号)などアメリカの記事がほぼ毎号掲載されている。しかし、その中に時にドイツに關係する記述があらわれてくる。それを検討することからこの章をはじめたい。明治二十四年三月の第五十八号には次のような文章があらわれている。

ロベルト、コッホ氏。

本誌の巻頭に掲げたるは、今日世界に救世主の名を得たるロベルト、コッホ氏の肖像なり。氏は独逸国ハルツ州の人なり、年二十三にしてゲッティンゲン大学を卒業し、其後専ら心を微菌学上に注ぎ、發明する所多かりしが、三十九の時結核病の原因は結核バチレンなることを証明し、医学社会の耳目を驚かしたり。(中略)又た氏は結核の本体を發見せしより後、これを撲殺し其病根を全治する方法を講究すること一日もたゆまざりしが、七年の星霜を経て、昨年の十一月に至り、遂に肺結核を治癒せしむべき前古未発の靈藥を發見せり。(中略)されど氏は極めて自ら謙讓して、「此新發明に対して世人の余に向て恩を謝するは誤りなり、顕微鏡製造人に恩を謝すこそ至当なれ。十年前には恐るべき仇敵たる結核微菌を照視するの器具なかりしが故に、医師の此症を治せんとするは宛も暗中に敵と戦ふが如くなりしが、今は瞭然敵を

照視することを得るに至れり、かく敵を視ることを得るに至らしめたるものは、余が力にあらず、実に顕微鏡製造者の力なり」といひしとぞ。  
(傍線引用者)

いうまでもなく、医学者としてのコッホは日本では既に知られていた。だが、この明治二十四年の前半、コッホについて最も多く発言していたのは誰だったか。そうした問いを立ててみると、鷗外こそ間違いない人であったのである。

此篇は明治二十三年十一月十四日、伯林「クリニク」週報が号外を發兌して世に公にせしロオベルト、コッホ先生の文を、吾友入沢達吉君が直に郵致せられしものなり。先生が結核(肺癆)の新療法を發明して、これを獸類に試み、第十回國際医学会にて其大要を報ぜしに、政府は特に先生に許すに、これを人体に試むることを以てせしは、世の知る所なり。爾來其結果奈何と、世の人の翹望せるさまは、歐亞二洲恐らくは深淺なかるべし。今此文は此世紀の医学に大影響をなすべき發明の分明に一步を進めたるを示すものなり。衛生療病志の發行者は、片刻も早くこれを讀者に紹介せむことを願ふを以て、明年一月九日に發行すべき号を繰上げて、号外の發行を計画し、聊読者諸君が平素の好意に酬いむとすといへり。蓋し社は射利の会合に非ざる故、此冊子を發兌して、明年一月又逐号發兌をなす程の余資なきなり。余は大に其志を嘉して、直に此文の翻譯に着手す。明治二十三年十二月二十六日、独逸より郵致せし原稿に接したる午後九時、  
林太郎識。

(傍線引用者)

この「衛生療病誌」の「結核療法の急報」の記述を初めとして、次のような文章が続々と発表されている。



コッホ氏の肺病新療法の急報（読売新聞）二十三年十二月

肺結核治療法に付き弁駁（読売新聞）二十四年一月

治勞餘聞（衛生療病志）二十四年二月

治勞統聞（衛生療病志）二十四年三月

コッホに繼いで出たる發明者（衛生療病志）二十四年四月

内科会にて結核素の評判（衛生療病志）二十四年六月

コッホの新療法につきて起りし仮名文字の説（衛生療病誌）同右

ロオベルト、コッホが伝（衛生療病志）二十四年七月より八月

つまり、鵬外によってコッホの新成果が刻々と報告されている時期に、「少年園」の記事は現われてくるのだ。

だが、そのことだけでは、特に密接な関連を認めることはできないだろう。この兩者には、さらに興味深い共通点が見られる。外国の人名の表記が一定しないことは現在でもしばしば起こるが、コッホの場合もそうであった。二十四年六月の「コッホの新療法につきて起りし仮名文字の説」にその状況が描かれている。それによると、コッホ、コッポ、コッフなどの他、官報でコヒと表記していた。そして「医事新聞」では、コッフという読み方を採用していたのである。まさに読みは揺れていたと言わなければならない。そうした中で、鵬外は一貫して「コッホ」と表記していく。ドイツで直接指導を受けた鵬外は、前に挙げたような一連の論を発表して結果的に呼称を統一することになるわけだが、二十四年三月に「少年園」がコッホと表記したことは注目されてもよいだろう。

また、「少年園」の記事の終わりの傍線を付した顕微鏡製造者への賛辞は、鵬外の「第十回国際医学会」（二十三年十月、衛生療病志）の以下の記述に次のような形ではほぼ合致する。「当時の視学的装置と実験とは、実に此上に出づべき観察をなすこと能はざらしめしなむ。幸なるは、忽然一新手段の成れるありて、（中略）顕微鏡には新「レンス」系を用ゆることとなりたるに、（中略）此まで髣髴と認得

たる細菌の形を今は画然と定視することを得るに至りぬ。」

ここまで述べてきたことは、言わば状況証拠に過ぎない。傍証という形でしかないわけだが、鵬外が「新世界の浦島」以降「少年園」と絶縁してしまったとするには、若干の疑念が残るのである。記事の執筆者としてではなく、英語圏の情報の中にドイツの情報も加えていく情報の提供者という関係も考えることが出来るのではないか。

### 第三章

「少年園」が廃刊となるのは明治二十八年四月のことである。日清戦争が戦われていた時期であり、軍事的なものについての記述や戦争の記事が多い。けれども、明治二十五年の段階で、ドイツのモルトケ將軍についての記述があるのは、いかにも突出した印象を与える。

元帥フアン、モルトケの伝。

現世紀の大軍人中、其筆頭に立てらるゝ元帥フアンモルトケは、六十四歳の高年に達して後、始めて其名を世界に顕はせり。フアン、モルトケが絶倫の智謀を露はしたるは、一千八百六十四年に、丁抹を破りたるに始まり、次で一千八百六十六年に埃地利をサドワの大戦に屈し、最後に一千八百七十年、拿破崙第三世を屈服したるに終れり。老いて益々壮なりとは、此大將軍に適用して最も可なるの語なりといふべし。

（中略）

一千八百八十八年八月職を辞して閑地に退き、悠々老を養ひ、隠然歐洲の鎮になりて世界の仰ぎ尊ぶところとなりしが、去年四月二十四日遂に病を以て没せり。

ヘルムウト、フアン、モルトケは、人綽名して『大沈黙家』といへり。誠に此綽名の如く、平常寡言にして、所謂泰山前に崩るゝも動かざるの風ありき。博く外国語に通じ、独逸、丁抹、英、

仏、西班牙、魯西亜、新希臘、土耳其等の國語をよくし、音楽絵画にも達し、劍術馬術に秀で、其外象棋骨牌の末技に至るまで巧ならずといふことなかりき。且つ又此大智謀家は最も親切柔和にして親み易く、時としては巧妙なる滑稽談話をも吐き、又文筆の才に富みて、東欧紀行等数多の著書あり。平常沈黙なるを以て、人はフアン、モルトケが一千八百六十七年国会に出で演説したりし時、実に其雄弁なるを知りて、意外に驚きたりといふ。

(傍線引用者)

第九十三号に掲載された小伝である。鵬外とモルトケとの関わりは、「独逸日記」をはじめとする日記や書簡から知ることは出来ない。けれども、明治二十四年二月の「治勞餘聞」にその名が見えている。その文章を発表してわずか二カ月後に亡くなったモルトケについて、ドイツへの想いを込めつつ語ったとも考えられよう。

「独逸日記」には、興味深い記述が多数あるが、中でも学生の決闘について次のようなものがある。明治十九年五月のことである。

二十二日。午前余猶試験所に在り。エムメリヒ来て余に告げて曰く。今日ヘルリイゲルスグロイト Helriegelsreuth の村酒店を借りて学生の決闘を行ふ。盍ぞ往いて観ざると。余喜びて諾す。独逸の学生は多く某の団 Corps 某の壮年一会 Burschenschaft と唱へ相結合して異様の衣を着、異様の語を吐く。是れ中古士風の遺にして、愛すべきところも少なからねど、亦弊害の甚しきものあり。即ち決闘是なり。夫れ壮年の士の剣を弄ぶは固より可なり。然れども争論の末決を私闘 Duell に訟へ、法律の許さざる所に出で、自ら是とす。豈憎む可きにあらずや。況や身体を毀傷し、其瘢痕に附するに名誉 Renommischmiss の名を以てするに於てをや。然りと雖、決闘は戦争と同じ。その廃絶は言ひ

易くして行はれ難し。唯これ個人の良心に委ねずして社團の制裁に附するものは、独逸大学の悪弊といふべし。哲学者ロオゼンクランツ Rosenkranz 嘗て詳にこれを論ぜり。学者読まざるべからず。(中略) 闘場には第学生数十人叢立す。中央に闘者対立す。各一介者 Sekundant あり。闘者の物の具附けたる様又奇怪なり。決闘の鎧は名づけて闘衣 Paulwachs という。その剣は名づけて闘刀 Rappier という。介者は大庇の帽を戴き、闘者は其頭を露せり。腹巻は上、胸に及べり。介者は大なる領 Cravatte を纏えども、闘者は革帯の広きを幾重ともなく頸に巻き附けたり。腕は肩より以下一面に之を包み、手には革の手袋を穿てり。其他大なる眼鏡を以て目を障う。鏡は望遠鏡の如き筒を備え、硝子は嵌せず。逆上して面色朱の如き闘者が此眼鏡を掛けたる様は、恰も新に釜中より出でたる章魚の如くなり。介者は号令す。構えよ Auf die Messur! の語にて刀を交え、撃て Los! の語にて揮い、止めよ Halt! の語にて止む。三度刀を打ち合はする毎に、休憩 Pause し、刀の屈曲せるを撓め直す。此役は闘者の右に在るものこれに任す。介者は左に在り。休憩を除き、十五分にて闘止む。互に握手して和を講ず。刀は甚だ鈍し。然れども瘡骨に及ぶこと稀なりとせず。此日十数対の闘あり。蓋し数月間の券を折るなるべし。一対を部 Partie と名づく。一部の瘡を療する間には他部物の具を着く。是の如きこと終日なり。

(傍線引用者)

鵬外にとって鮮烈な体験であつたことが伝わってくる。ところで、明治二十六年七月の「少年園」にも学生の決闘について、次のような記述を見ることができるのである。

独逸学生の決闘。

独逸諸大学の学生はベースボール、端艇競漕、フットボール、



テニス等の戸外遊戯を余り好まず、其代りに決闘をなすこと頗る盛なり。今こゝに其決闘の模様を略述せんに、

決闘者は先づ相對して直立するなり、一度其位置を取る上は一歩も動くところからず、恰も樹木の立てるが如く、直立したる儘進むもとなく退くともなし、手と腕と頸とは厚き綱帶を以て蔽い、傷を受けることなからしむ。此故に決闘者が互に傷けんとする所は頭にあり。

かくて相闘はんとする時、右の腕を肘と直角に差し延ばし、手を頭の高さにして単に手腕を用ゆるのみ、腕を十分に差出して縦横自在に動かすとは固く禁ずる所なり。かく運動自在ならざるが故に、其打撃も軽からんと思はるれど、實際は然らずして、熟練したる決闘家は多年の経験により、其手腕を動かすとの自在なる、全き手を動かすに異ならず。一撃にして相手の頭を破るが如きと稀ならず。かくていよく相闘うとき、相方共に一定の位置に立ちたるまゝ、進むとも退くともなく、又身をかわして敵の打撃を避くるともなく、働手腕を動かして敵の打撃を防ぎ、同時に又敵を傷けんとするなり。

かく進退動作に制限あるが上に、手頸等を蔽いあれど、猶動もすれば大傷を受くとなきにあらざれば、介添人二人は決闘者の両側に立ち、若し決闘の法則に背くが如き打撃をなすとあれば、直ちにこれを妨げて、害を未然に防ぐなり。かくれば此介添人となる者は此道の達人にして、経験に富み敏捷なる者ならざるべからず。

別に審判者なる者あり。亦決闘者の傍に立ちて仔細に決闘の次第を監視し、若し決闘者にして決闘の規約に背くが如きとあれば、直ちにこれを中止せしむ。且つ審判者は決闘の時間を制限し、時々決闘者をして休息せしむるの任あり。前にも述ぶるが如く、決闘者は直立したるまゝ寸歩も動くことなくして相闘ことなれば、忽ち疲労して永く其位置を保つこと能はざるが故に、時々

休息して鋭気を養はざるべからず、此故に實際相撃つと数回なる時は審判者は「止れ」と声かけてこれを中止せしめ、暫時決闘者をして休息せしむるなり。かくて数分の後、又相闘い、数回の後決闘者の一人傷を受けて闘に堪えざるに至るか、又は審判者が「時充ちたり」と呼ぶ時初めて決闘を終るなり。其決闘の時間は、予め相互の間に約定しあるなり。

而して其負傷の浅深を檢し、決闘者の闘に堪ゆるや否やを定むるは、これ外科医の任なり。

決闘に用ゆる武器は、平たき真直なる鋼鉄の剣にして、其刀尖は態と鈍くしたり、されども猶力を極めて突くときは重傷を蒙らすの恐れあれば、突くとは堅く禁じたり。此種の剣を独逸の学生は、名づけてクリンゲンという。此外にサーベルと称し、通常の刀剣の如く屈がりたるものを用いることもあり。

(傍線引用者)

やはり無署名の文章であるが、かなり精細に学生の決闘について述べていることがわかる。二つの文章は、鷗外の所謂「独逸大学の悪弊」を描いているが、文章の様式は全く異なっている。「独逸日記」は実際に見た決闘を精細に描いているのに対して、「少年園」ではルール説明とでも言えるような概括的な記述に終始しており、体験的な生々しい叙述は全くない、という非常に興味深い対比をなしている。この「少年園」の記述に鷗外の体験(傍観者として)した決闘は見られないので、だから関連を論ずることはとても難しいことなのだが、その一方で私にはこれだけ精密な決闘の細部に至るまでの叙述が誰に可能だったろうか、という疑問も残るのである。

## 結 び

鷗外の文学活動の背景と言うべき部分の略述、しかも相当粗い叙述になってしまった。けれども、鷗外と「少年園」との関わりの可能性

を概括して示すことはできたように思う。

英語圏の記事が圧倒的多数を占める中で、ドイツ語圏の話題は必らず鷗外と関連が認められる。それは言ってみれば鷗外が、ドイツ文化にいかにも広くそして深く関わっていたかの証明である。だが「少年園」創刊直後の関係も考慮するなら、両者の潜在する接点を想定することもできるだろう。

「少年園」に、時にはニュースソースとして関わって行く鷗外。そうした視点を設定することがはたして可能かどうか。これは限りなく困難な試みであるかも知れない。ただ、そうした潜在的な関係へのアプローチの蓄積が新たな視野を持たせるように考えるのである。

注① 鷗外は「ロオベルト」と「ロベルト」とを同時期の文章の中で混用している。(例えば、「コッホ氏の肺病新療法の急報」ではロベルト)

「少年園」の記述を区別することはできないように思われる。

また、コッホの異表記として鷗外が指摘している他に、同時期にドイツ留学をしていた中濱東一郎による「古弗」があることを報告しておきたい。(『時事新報』明治二十四年四月二十四日広告欄)